

 <small>あ</small> 財団法人日本漢方医学研究所 漢方友の会		※ ※ ※		
		<h1 style="text-align: center;">特 集</h1> <h1 style="text-align: center;">年 頭 所 感</h1>		
Vol.51	<h1 style="font-size: 4em;">1</h1> 月号	※ ※ ※		
No.1				
2009年				

年頭所感

(財)日本漢方医学研究所理事長

滝戸道夫

新年おめでとうございます。

中国の大地震から半年経ちました。漢方薬の構成生薬の主産地である四川省を中心とした災害で、生薬の供給が如何になるのかと本当に心配しました。生薬関係の方々との並ならぬお骨折りで、現在は何とか必要量を確保出来ているとのことで一先ず安心しました。しかし今後、種々の事情を考えると国産の品質の一定した良質の生薬の生産を真剣に考える必要があると強く考えさせられました。それで、一つ朗報。かねてから日本東洋医学会の「漢方原料調査委員会」が企画、実施してきました「希少種のサドオケラを奈良県の十津川村で試作、調製し、往年の佐渡蒼朮を復活生産する」と云う研究で、近年この佐渡の蒼朮を生産する体勢が出来てきましたが、最近、この蒼朮を御使用なされた諸先生方から良品であるとのことを度々お伺いします。非

常に喜ばしいことで、是非薬局方品として広く利用されると良いかと念願しています。

次に、わが財団法人日本漢方医学研究所ですが、御存じのように、法人制度が変更になり、平成25年までに、定款変更、事業計画、収支予算、財産目録や貸借対照表などを提出して、許可を得なければならなくなりました。

現在、新執行部の下に従来からの業務（漢方医学講座、臨床講座、渋谷診療所での研修、機関誌『活』の発行および漢方関係書籍の管理、運営など）を実施してきておりますが、今後の研究所のあり方や業務内容などを検討しなければなりません。近年は一般に漢方医療に対する種々の知識が広められてきておりますが、正しく漢方療法の普及を語る為には、日本漢方医学研究所の活動が益々重要になると考えられます。法人申請にあたって、ぜひ会員の皆様のこれまでの運営やこれからの業務内容などについての忌憚ない御意見、御希望などを頂き、それに沿うように検討させて頂きたく存じます。よろしく御一報下さいませようお願い致します。

本年も会員の皆様方が健康でご活躍なさいませよう期待いたしております。

漢方薬の国際化と科学化のために

北里大学北里生命科学研究所

山田陽城

第十五改正日本薬局方で、6 漢方エキス処方
方が日本薬局方に収載された。公定書への収
載で漢方処方品質が法的に規定された意味
は大きい。漢方処方の薬効の薬理作用やその
メカニズムについて今後も基礎研究を通じた
さらなる科学的解明が望まれる。

漢方処方についての基礎研究や臨床研究の
ためには、その成分組成は標準化により規格
が統一されていることが必要条件である。し
かし、現状は同名の処方でもエキス製剤では
メーカーにより構成生薬が部分的に異なっ
ていたり、その分量が異なっている場合もあ
るため教科書への記述はなかなか難しい。

漢方処方の薬効は煎剤やエキス製剤の場合
は配合生薬から煎出された複数の成分により
現れるため、再現性のある薬効を求めるた
めにはその含有成分とその分量は一定である
必要がある。天然素材を用いることによる許
容範囲内でのばらつきはしかたがないとして
も、同名処方でも複数の規格の存在は研究を
する上ではやっかいである。

研究成果の論文文化に際し、使用した方剤の
メーカー名等について記載したとしても、こ
の相違は特に欧米人には理解しにくいこと
と思う。メーカーの相違により適用の相違も
あるが、同一名の処方として区別されること
なくいろいろな薬理作用が示されている可
能性がある。

規格の統一がすぐには難しいなら組成が異
なることによる薬理作用の相違について、少
なくとも明確に区別していくことが必要で
ある。

学生の心に残る言葉

慶應義塾大学医学部漢方医学センター

渡辺賢治

あけましておめでとうございます。

本年もよろしくお願いたします。日本漢
方医学研究所の漢方医学講座を担当してい
る。場所は30年前と同じく東京駅の八重洲
ホールである。当時は第一信金ホールと言
っていた。当時医学部の学生であった私はツ
ムラ研究所長の細谷英吉先生のお計らいで漢
方医学講座に通った。当時慶應の薬理学に
いらした徳永先生も聴講されていた。傷寒
論解説をやっていたのは覚えているが、そ
の内容についてはほとんど覚えていない。し
かしながら大塚恭男先生が「中国は何でも
3つのランクに分ける。上医、中医、下医と
あるが、現在では一番もうかるのは下医で
ある」と言っておられたのを記憶している。
その上医にあらがれ予防医学を志して卒後
糖尿病医になったのであるから、若い頃の
刺激は貴重なものである。現在聴講されて
いるのはベテランの医師が多いが中には
学生風の方もまぎれておられる。何か心
に残る言葉を一つでも残せれば幸いです。

年頭所感

『活』編集委員長

足立秀樹

明けましておめでとうございます。

今年は良い年になりますようにと願わず
にはいられませんね。それほど去年の世相
は厳しかった。経済・政治の様相は収拾
のしようのないもので、根源的に発想を
変化させないと同じことを繰り返すばかり
だろうと思わせ